
『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

ライガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

【Nコード】

N5250Y

【作者名】

ライガ

【あらすじ】

絶命した楔ちゃんが明久に憑依した……という妄想を詰め込みました。更新不定期。よろしくお願いします。

「……は？」（前書き）

バカテスト・化学

第一問

以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例…ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例…』 『オリハルコンとか言う伝説の金属を使えば』 『攻撃力の問題も解決すると』 『僕個人としては思いますけどね』

教師のコメント

二次元と三次元の区別はしっかりしましょう。そして攻撃力が問題ではありません。

「……は？」

人はみんな
自分は死なないと
思っている

いつか命が
尽きることを
頭では理解していても

それは今日や明日じゃ
ないと思っている

だけど死ぬ

今日も死ぬし明日も死ぬ

事件で事故で
病で偶然で

寿命で不注意で
裏切りで信条で
愚かさで賢さで

いつだって
みんな死んでいく

そんな中
女の子のために
死ねる僕は

残念ながら
幸せだ。

人はみんな
自分は殺さないと
思っている

殺人事件が

連日連夜報道されようと

それを

人生とは無関係な

ドラマと同じように

眺めている

だけと殺す

人は人を殺す――

何があるうと殺す

恋愛感情で損得勘定で

戦争で平和で

車で食事で

うっかりで甘やかして

漫画の影響で勘違いで

いつだって

人は人を殺してきた

友達のために殺すのなら
少しかだけ許される気も
するけれど

それもきつと
勘違いなのだろう。

覚悟は決めた。

か弱き者を守るためなら――

この命さえ、惜しまないと。

「……………ところで宗像くん。「先に動いたほうが悪くなる」って例の言説、信じる？」

「……………」

「漫画じゃよく見る台詞だけど、現実的にはどうなのかなあ。普通に考えたら先に動いたほうが勝つよねえ」

「だったら試しに先に動いてみたらどうだい？漫画好きの球磨川くん」

切り傷や銃創が目立つ、学園の廊下。二人は覚悟の印に上着を脱ぎ捨て、自分の個性を捨て、余計な武器は捨て、命と名誉さえ捨てる。

球磨川楔。女の子のために命さえ惜しまない、マイナス過負荷の筆頭。

宗像形。友達のために人生さえ惜しまない、アブノーマル異常の悪魔。

彼らを見て、人は何を思うのだろうか。

「えー？先に動いていいのー？あーでも折角のお勧めですけどさすがに気が引けるかな」

饒舌に喋るのは球磨川楔。脱いだ上着の下は廊下の壁にあるように銃創がくつきりと浮かび上がり、瀕死と呼べるほどの血に濡れている。

自分の死期を悟った男である。

「ここは公平にいち、にの、さんで動こうよ」

寡黙に目を細めるのは宗像形。彼の周りには武装していたあらゆる武器が散乱しており、殺人のために身軽さを身につけている。

自分の潔白を汚した男である。

「いいかい？ カウントダウンいくよ？——いち、」

二人は動かない。真っ向から静かに対峙する二人を見守るように、廊下の傷痕は戦いの行方を眺める。

次の瞬間。

「にの！」

二人が動いた。

ゴウッ！！という疾風の音が響き、不意打ちを企んで取り出した螺子で放った攻撃は、惜しくも宗像形の額を掠る程度に留まる。

なぜなら、球磨川楔だけに限らず、同じく宗像形も動いたからだ。

奇襲の失敗。その代償は己の命。宗像形の繰り出した手刀は球磨川楔の首を確実に貫き、致命傷を与えた。

「がっ……ふっ……はっ……」

「瞬殺。なるほど、真黒くんの言ってた通りだ。武器をすべて捨てたほうが軽くなって殺しやすい。そして生まれて初めて人を殺した」

運命が変わることはなかった。

死期を悟った男は死に、潔白を汚した男は後戻りもままならなくなつた。

強い意思を宿していた宗像形の瞳が、急速に崩れ去る。無限の殺意を持った男に残ったのは、

「けれど、意外とつまらないぞ殺人^{これ}……」

過去の自分への疑問と、虚無感だった。

「いつ……いやああああっ！！みつ、楔ちゃああんっ！！」

戦いを終えて役目を果たした戦場に、甲高い悲鳴が響き渡る。喜界島もがな。球磨川楔が命を懸けて守り抜いた女の子。

（あーよかった……）

意識が薄れていく中、確かに感じた。

「」

唇に、自分の守り抜いた——温もりを。

（あは……こりゃ役得だ、なあ）

そこで、糸が途切れるように。

球磨川楔の意識は暗転した。

「……………」

目が覚める。覚めることができる。まず最初に思ったのは、そんなごくごく平凡なこと。

「あら、目が覚めたのね」

上体を起こして自分の状態を確認——することはできなかった。途方もない脱力感が体と意識の両方を襲い、どうしても起き上がることができない。

体中の質感と薬品の香りから、どうやらここは保健室のベッドのようだ。そういえばこの間見たナースもののエロ本は微妙だったな、とどうでもいいことを考える。

「具合のほうは大丈夫？気分は悪くない？」

自分の顔を覗き込んでくるのは、まるで初対面の相手だった。白衣を着ている辺り、保健医なのだろうが…… 本当に見たことがない。もう一度よく見よう、あわよくば唇でも奪ってやろうと上体を起こそうと再び試みる。

「ダメよ、起き上がっちゃ。いきなり倒れたんだから、ちゃんと休養は取らないと」

「……は？いきなり倒れた？」

「ええ、振り分け試験でね。残念だけど、Fクラスになっちゃうわね……この学園、そういうことは厳しいみたいだし……」

頭の上に疑問符が浮かび上がると同時に、体中に違和感が訪れる。

まるで——自分の体ではないような感覚が。さながら、身に覚えのない衣服を知らない内に着ていたように。自分の体に——まるで記憶がない。

「とにかく、まだもう少し寝ていてね。」

——吉井くん」

「……………」

首を動かして状況の把握に取り掛かる。その目が捉えたのは、洗面所の鏡に映る自分の姿。

黒髪ではなく、茶髪。

瞳の色も、黒から茶色へ。

顔の形は、童顔という言葉がよく似合う——ちょっとバカっぽさが目立つ顔立ち。

自分の顔ではなく、他人の顔なのは明白。そしてその他人の顔の持ち主が、自分であることも。

「……………あつれえええええつ!？」

4月。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎えるための桜が咲き誇っている。まさしく満開という言葉がよく似合うような、桃色の花弁を花開かせて、その桜達は新たな門出に立った生徒を歓迎していた。

風にさらわれた桜は紙吹雪を彷彿とさせる。誰もがその光景を見て目を奪われる中、その男子生徒は散った桜しかないであろう地面に顔を向けたまま、いわゆる俯いた状態でブツブツと愚痴をこぼしていた。

「『あーあ意味わかんない』『これまさか安心院さんの仕業?』『まったくやつてられないや』」

吉井明久。

道が桜の花で覆われる中、一人だらだと歩く。その様子は夢と希望に溢れた新入生のものではない。そもそも、彼が夢や希望などという真つ当な感情など抱く訳もない。

彼は真正銘——過^{マイナス}負荷という人種なのである。

「『しかもなんだよあれ？』『家にある食べ物が割り箸だけってどういうこと？』『驚きのあまり』『美味しく頂いちゃったよ』」

吉井明久。

彼の名前はそういうことになっているが——正しく言えば少し違う。元々、吉井明久という人間はこんな括弧付けた喋り方はしないし、愚痴を垂らす程何かに悩むような頭のいい人間ではない。どちらかと言えば、百人中百人がバカと答えるような人間なのだ。

そう。彼の本当の名前を、この世界で知る者は誰もいない。

また。彼の本当の名前が、この世界で知られることはない。

そして。彼の本当の名前は——

「『まあいいや。』『真人間を目指す僕にとっちゃ』『0からのスタートってのもなかなか悪くないぜ』」

球磨川楔。

桜並木の続いていた道の終わり、その学園の前に彼は立ち。

彼の文月学園での第二の人生が、幕を開けた。

「……やりにくいなあ」（前書き）

バカテスト・国語

第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きるたとえ』

姫路瑞希の答え

- （１）弘法も筆の誤り
（２）泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- （１）弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『（１）ツンデレの失敗料理』
- 『（２）涙目で裸エプロン』

教師のコメント

とりあえず言いたいことは、（１）はともかく（２）は犯罪臭がします。

「……やりにくいなあ」

「吉井。遅刻だぞ」

「『……………』」

校門を抜けた明久を呼び止めたのは、筋骨隆々という言葉をそのまま擬人化したような男のドスの効いた声だった。傍らには空っぽの段ボール箱を持ち、表情からはやれやれ、という感情が伝わってくるような呆れの顔。

彼の名前は西村宗一。補習室の鉄人とも呼ばれる、文月学園の生徒から最も恐れられている存在である。だが、明久はその脇をさつさと通り抜け、まるで無視するような形で生徒玄関を目指した。

それも仕方がないといえば仕方がないことだ。なにせ、彼は^裸この世界で知り合いいはない。知り合いとは、互いに『知り合う』からこそその関係が成り立つのだ。今の彼は、誰のことも知らない、しかし自分のことを知っている人間はいるという一方的な立ち位置にいた。それに、吉井という名前を呼ばれても、それは自分の名前ではない。故に、明久が西村教諭の言葉に気づかなかったのも、自分の名前に呼び慣れていないのも無理はなかった。

「吉井！お前のことだ！」

「『……あ、僕か。』『何か用ですか？』」

「教師を無視するとはどういっつもりだ、まったく」

「『あははすいません』『ちょっとうつかりしましたー』」

「お前はうつかりで自分の名前を忘れるのか……」

少し不機嫌になった西村教諭の顔が再びやれやれという表情に逆戻りする。ここでぼんやりとしていた、ではなく自分の名前を忘れた、と思われるのが吉井明久という人間だった。千人中千人がバカと豪語する人間なのである。

「まあいい……それより、体調のほうは大丈夫なのか？」

「『体調？』『見ての通り最悪ですが』」

「そうか、元気そうだなによりだ。実は、俺はお前が倒れたと聞いて……『吉井はバカだったんじゃないかったのか？』と思ったんだ」

ひどい言われようだった。

「『あははー何か』『さりげなく罵倒された気がしますけど、』
『まあそうですね。バカは風邪を引かない』『とか言いますし。』
『まあバカだから』『風邪を引くとも言いますけどね』」

「そうだな……。吉井なら、それすらも超越したバカだと思って
いたんだが……。すまない。俺の勘違いだったようだ」

「『ねえアンタ本当に教師？』『そろそろ聞き流すのも難しくなっ
てきたぜ？』」

今までの吉井という人物に興味が隠せない明久（稗）だった。

「む、話が長くなってしまったな。自分のクラスは知っているだろ
う？ 急いで行け」

「『ああ、Fクラスでしたっけ』『了解です』」

話に区切りがつき、明久が校舎へ向かって再び歩き出す。それを見
送る西村教諭は、全身を包む違和感を感じ取っていた。

「……まだ調子が悪いのか？」

彼の名前は球磨川楔。

いずれこの学園を掻き乱すこととなる、世界の異物^{マイナス}である。

「『2・F、2・F……』 あ、ここか 『よし帰ろう』」

自分の下駄箱を見つけるのに一苦労、自分のクラスを見つけるのにまた一苦労して自分のクラスの前に辿り着いた明久。だが、早速帰りたいという衝動に駆られた。

それというのも、全ての元凶は目の前にある教室の惨状である。机ではなくちゃぶ台（傷だらけ）。椅子ではなく座布団（綿なし）。床には（腐った）畳。ホームレスご用達の設備だった。

「『これが格差社会ってやつかよ』『うっわどうしょ』『今すぐめだかちゃん呼びたくなってきたぜ』」

「ぐちぐち言っでないで早く座れ！このウジ虫野郎！」

今にも壊れそうな扉を開くと同時、容赦ない罵倒を浴びせられる明久。この世界の人間は罵倒なしで生きられないのかと思う程、若干どころか本気で帰りたくなった明久だが、彼の中で小さな火が灯されたように興味が沸いたことでなんとか踏み止まった。

明久が興味を持ったのは他でもない、この格差社会を如実に再現した学園にだ。きっと他にも楽しい娯楽があると、明久は考えたのだった。

「『いきなりウジ虫呼ばわりなんてひどいよ』『僕、すごく傷ついたんだけど』『そういう人の悪口はよくない。』『今すぐ謝れ！』『このゴリラ』」

「わかったわかった。早く席に——って待てや！今言っただろ！『ゴリラ』ってめっちゃくちゃ言っただろ！？」

「『そうだっけ？まあどうでもいいよ』『それより知ってる？』『ゴリラの正式名称ってゴリラ・ゴリラなんだぜ？』『ぶっ……』」

「それ今話す話題じゃねえだろ！？しかも最後笑ったか！？ぜってえ笑ったよな！？」

明久に第一印象でゴリラと呼ばれた男子生徒が勢いよく憤慨する。彼の名前は坂本雄二。このクラスの代表なのだが、どうやら教壇に立って教室を見回していたようだ。その馴れ馴れしい言動から、どうも吉井明久の知人のようである。

今にも取っ組み合いになりそうな感じで話を続ける二人だが、やがてそれは扉から入ってきた教師によって止められた。

「えー……席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

よれよれの背広に生きることになったような顔。どうやらこの最低クラスの担任のようだ。

「『はい』」

「ういーっす」

と、そこで明久はおや？と首を傾げる。さっきまであれだけ険悪だったのに、この男子生徒は大して気にしていない様子だったのが意外だったのだ。この吉井明久とは、恵まれている人間らしい。

「ん？なんだ明久？」

彼の視線に気づいた男子生徒が気軽に声をかけてくる。その様子に、明久は若干眩しそうな表情かおをしながら、

「『……いや、』で、名前なんだっけ？』『うっかり忘れちゃったよ』」

「……お前、やっぱり一回病院に行ったほうが……いや、現代科学じゃ無理か。坂本雄二、だろうが。思い出したか？」

やっぱり、にアクセントを置いた台詞に、明久は男子生徒の名前を小さく繰り返す。やがて視線は雄二に向き、とりあえず名前で呼んでみることにしようと結論づけた。

「『残念ながら思い出せないや』『一年間よろしく、雄二くん』」

「あいよ」

苦笑いをしながらヒラヒラと手を振る雄二。それを見て明久は、

（『……やりにくいなあ』）

ポリポリと頭を掻きながら、居心地悪く近くの座布団に腰を降ろすのだった。

「……やりにくいなあ」(後書き)

誤字脱字、感想、おかしい点などお待ちしています

「……それはどうかな?」(前書き)

バカテスト・英語

第三問

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「『大地の母、ブックシエル。レギュラー入り!』」

教師のコメント

野球ではありません。そしてgrandmotherとは祖母と訳します。

「…………それはどうかな？」

「えー…………このクラスの担任になりました、福原…………」

教壇に立つこのクラスの担任を名乗る人物が黒板のほうを振り返る。だが、そこにあるべきものがなく、一回転するように再びFクラスの生徒のほうへ向き直った。

「……………慎です。何か不備があれば申し出てください」

チョークすら用意されていないことに呆気に取られるクラス一同。そんな中、にこにことした表情を崩さずに元氣よく手を上げる生徒がいた。

明久だ。

「『はい先生』『座布団の綿がありません』」

「我慢してください」

「『はい先生』『窓が割れてて寒いでーす』」

「我慢してください」

「『はい先生』『ちやぶ台の脚が折れましたー』」

「我慢してください」

「『はい先生』『自称担任とか言う人がムカつきまーす』」

「我慢してください」

「『あははー』『お前NPCかこのやろっ』」

「では自己紹介をお願いします。じゃあ、窓際の人から」

「『……………』」

あまりのひどい扱いに明久はちよつとどころかなりブルーになった。イジイジと体操座りでケータイを弄り出す明久だが、とりあえず自己紹介は聞いておくかと窓際のほうに意識を向ける。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

（『ふむふむ、ジジイ調くんか』『キャラが強いね』）

「……………土屋康太」

（『ふむふむ、三点リーダーくんか』『キャラが強いね』）

「須川亮です。みんな……………恋にうつつを抜かす異端者を裁く、異端審問会に加入しないか？」

『『入会を表明しよう』『』』

「ふ……………友よ」

「『……………』」

「おい明久帰るにはまだ早いぞ」

「『離して雄二くん！』『僕こんなところでやってける気がしないよ！』」

鞆を抱えての脱走を雄二に止められ嫌々席に戻って再びケータイを弄り出す明久。そういえばさっきから男しかいないじゃないか……
と思考がネガティブになりながらも、そんな明久を置いて自己紹介は続く。

「島田美波です。ドイツからの帰国子女で、日本語の読み書きは苦手です」

やっと女の子だ！！と速効でケータイを放り投げて声のした方向を向く明久。向けた視線の先にはサラサラの髪をポニーテールに括り、整った顔立ち、スラリとした体躯の、いわゆる美少女がいた。

ほわー、と明久が目の保養にしていると、その美少女と目が合う。
『ジロジロ見すぎたかな？まあいいや透視できるまで見ていよう』
と、わりと無茶かつ失礼なことを思っていたところだった。なんと、目が合った美少女が手を振ってくるではないか。

（『おおおおお！』『すごいぜこれキタんじゃない！？』『マジでグッジョブ明久くん！』）

（（（チ……ッ！）））

中学生のように心をときめかせている明久を見てカッターナイフなどの文房具を取り出すクラスメイト。

「予想通り、バカばかりじゃのう……」

「……………これはひどい」

先ほどのキャラの強い二人のなかなか的を射た発言は誰の耳にも入ることはなかった。

「それで、よくウチを乱暴者と誤解してる人がいるみたいけど……
…ウチは男の子に暴力振るったりしません。一年間、よろしく願
いね」

そう言っつて締め括り、すんと座布団に座る美少女改め美波。

そんな動作まで可愛らしく映るのだから不思議なものである。

「えー……じゃあ次、吉井くん、お願いします」

と、ついに明久の番がくる。自分の見る限り、周りにいるのは男ばかりで女子はさっきの美少女一人だ。先ほど手を振ってきたこともあり、自分の印象はきつと悪くないはずだ。クラスで唯一の女子というだけあって、明久はぜひともお近づきになりたいと思っていた。幸い、次の自己紹介は自分の番である。立派な好青年を演じて美少女とお近づきになると、不純な思考の下、明久は立ち上がった。

「『吉井明久です！仲良くしてやってくれと嬉しいかなっ』『それと、タイプの女性はあまり暴力を振らない人です！』」

「……………（ピクッ）」

「『あと、自分で言うのもなんだけど』『僕って結構惚れやすい性格です！』」

「……………（ビキビキ）」

そこでチラッと美波のほうへ振り向くと、あっちも明久のことを見ている。ものすごくいい笑顔だ。どうやらもう一押しだと考えた明久は、その一押しを実行することにした。

「『最後に、実は僕——』『ペッタンコが大好きでぎゃあああああ

あああああつー!!」

ドロップキックが飛んできた。

「前言撤回よ！ただし吉井明久は例外っー!!」

「『痛いよ!』『マウント取ってひたすらグーで殴るのやめて!』
『あと男子の夢を返してえっー!!』」

『異端審問会の諸君。君達は馬乗りにされている男子を見てなんと
思っ?』

『『殺さないことがあるっか?いや殺す』』

「予想以上にバカばかりじゃのう……」

「……………これはひどすぎ」

先ほどのキャラの強い二人のかなりの的を射た発言は誰の耳にも入る
ことはなかった。

クラスメイトが各々文房具という名の凶器を持ち出し、未だ明久は

マウントポジションを取られているというカオスな状況。しかし、意外にもそんな状況はすぐに静まることとなった。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『『『えっ？』』』

ガラスと扉が開く音とその後聞こえてきた女子の声に、その場にいた全員の視線が集中する。その人物を見て、もはやボロボロ状態の明久を除く全てのFクラスの生徒の動きが完全に止まった。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

『あのー……質問いいですか？』

小柄な体をさらに縮こませるように声をあげ、自己紹介をする桜色の髪と新雪のように白い肌が美しい女子生徒。その女子生徒に、文房具を持ったままの男子生徒の一人がおずおずと手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

『なんでここにいるんですか？』

「『なんでここにいますか？』』『おいおい随分失礼なことを聞くんだな』『可憐な女子に対してなんて口の聞き方だよ』『これだからモテない男は嘘です調子乗りましたごめんなさい』」

首元にカッターナイフを突き付けられて明久は口をつぐんだが、質問をした男子生徒の疑問はもつともなものだった。

それというのも彼女、姫路瑞希はFクラスに留まるような学力の持ち主ではないからだ。彼女はこの学園で入学最初のテストで学年次席に食い込むほどの頭脳を持った才女なのである。

そんな生徒がなぜFクラスに？と疑問に思うのは当然なのだ。

「そ、その……振り分け試験で、高熱を出してしまいました……」

だが、そんな彼らの疑問も、明久含めてすぐに『ああ、なるほど』と頷いた。

振り分け試験で欠席や途中退席すると無得点扱いにされてしまうのだ。明久も実際経験していたため、そのことだけは理解できた。疑

問が取り払われ、今度は数々の言い訳が飛び交う。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？むしろ熱出たほうができただろ』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『ちはやだっけ？アイマスもいいが、あまり自分を見失うなよ』

『俺は妹が事故に遭って、付きっきりで看病してて』

『どう見ても妄想です。本当にありがとうございます』

「う、ウチも日本語が読めなかっただけで……」

「『いやそれどう考えても致命的——』『すいませんでした』」

「よ、よろしく願いしますっ！」

瑞希がそう締め括り、怒気の引いたクラスメイト達が自分の席へと引き返していく。美波も馬乗り状態を解き、自分の席に戻った。

そんな動作が今度は荒々しく見えるのだから不思議なものである。

明久も自分の席に何とか戻ると自己紹介が続行された。ぐでつとしたままちゃぶ台に突っ伏していると、明久の耳に先ほどの女子生徒の声が聞こえてきた。

「き、緊張しましたあゝ……」

その声だけで俄然元気になるのがモテない男の性なのだが、そんなことは露知らず、明久は復活した。

「おい姫路、体調のほうはもう大丈夫なのか？」

雄二の野太い声で再び撃沈した。

「は、はいっ。えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願い——って吉井くん！
？」

だらーっと突っ伏す明久を見つけた端希が驚きの声をあげる。どうやら自分のことを知っている人物のようだ。

「姫路。明久がブサイクですまん」

「『ねえ雄二くんそれフォローのつもり？』『雄二くんが原因なんじゃないか』『ごめんね、雄二くんがゴリラで』『バナナをあげれば何もしてこないから』」

「お前も随分な言い方だなオイ……！」

明久と雄二がメンチを切り合う中、瑞希がオロオロと場をとりなす。

「そ、そうじゃないんです！あの、明久くんは試験中に倒れたと聞いたので、それで……！あの、明久くん、もう大丈夫なんですか？」

「『ああ僕？』『見ての通り最悪だよ』『姫路ちゃんこそ無理しないでね』」

「しかし明久が倒れるとは……天変地異崩壊瓦解の前触れか？」

「『ねえ雄二くん』『僕が倒れるだけで世界が粉々なの？』『じゃあ大切に扱ってくれよ坂ウホくん』」

「おんもしれえあだ名ありがとよおバカ久あ……！！」

再びガンのくれ合いを繰り広げる二人にオロオロする瑞希。ひよっ

とすると、実はいい相性なのかもしれない。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせいでパンパンと教卓を叩いて福原教諭が警告をし、

バキィッ バラバラ モワァ

教卓がゴミ屑と化した。それと同時にどこに隠れていたのか、埃が
ありえないほどに舞う。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言つてトボトボと教室から出ていく福原教諭。あの人うつ病じ
やないよな、とクラスメイト達は若干心配になった。

「あ、あはは……」

「『はあーあ』『もう笑うしかないよこの設備』」

瑞希が苦笑いをし、明久が呆れ返る。それを見た雄二は、誰の耳に入れる訳でもなく、

「……それはどうかな？」

そう、不適に呟いた。

「さて、坂本君。君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

その後、壊れた教卓の替えを持ってきた福原教諭が戻り、HRが再開。とうとう最後の雄二の番になる。

ゆつくりと教壇に歩み寄るその姿は先ほどのふざけた態度は見られない。クラスの代表として、なかなかの貫禄があるように思える。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「『じゃあゴリラね』『はい決定』」

「さて、みんなに一つ聞きたい」

明久の冷やかに全く動じない雄二。そんな雰囲気そうさせているのか、間の取り方がうまいせいか、クラスメイト全員の視線が雄二へと向けられる。

その様子を確認した雄二は、ゆつくりと誘導するように視線を泳がせ、教室内の各所に移りだした。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れたちゃぶ台。

バカっぽそうな顔面。

腐敗した脳みそ。

「『ねえ雄二くん』『君とはぜひ決着をつけたいなあ』」

「Aクラスは冷蔵庫完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

明久の発言を華麗にスルーし、一呼吸置いて静かに告げた。

「——不満はないか？」

『『大ありじゃあああああああ——っっ！！！！！！！！！』』

二年Fクラス生徒の魂の叫びが、学園を揺らがせた。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

雄二の発言に同調するように次々と不満が爆発する。その反応に満足した雄二は、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべる。野生味満点の八重歯がキラリと光り、

「そうだな。諸君の気持ちは痛いほどわかる。そこで、これは代表としての提案だが――」

沸騰した場の空気が雄二の声を響かせるために鎮められる。大声の余韻が残る中、

「――FクラスはAクラスに、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

クラスの雰囲気はその一言で凍り付く。そんな中、ただ一人動く者がいた。

（『へえ……？』『やっとおもしろい展開になってきたぜ』）

彼の名前は吉井明久。

旧名、球磨川楔。

明久^裸はこれからの展開に期待に胸を膨らませ、誰よりも不敵に表情を歪ませ、嗤うのだった。

「だからこそ」(前書き)

バカテスト・物理

第四問

問 以下の文章の()に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、()である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え

『敵』

教師のコメント

あなたに何があったのですか。

須川亮の答え

『俺の嫁、すなわち女神』

教師のコメント

現実を見ない者に女神は振り向かないかと思えます。

「だからこそ」

FクラスのAクラスへの宣戦布告。ピラミッドで例えるなら、底辺が頂点に挑むという構図。

その戦いに勝利を収め、設備を奪う——それは、Fクラスの人間にはあまりにも現実味がなさすぎて、あれほど堂々としていた雄二が夢物語を語る哀れな人間としか映らなくなってしまっていた。

だが、どんな事象であろうと例外は憑き者である。

吉井明久。彼は雄二の言う言葉に強く興味を持った。底辺Fクラスによる頂点Aクラスの打倒。あまりにも滑稽で、かつ迷走していて、さらに荒唐無稽な話。

それは、とてもじゃないが無謀だ。

それは、誰が見ようと蛮勇である。

そんな提案に、なぜ彼はそこまで強い関心を示すのか。その答えは実に簡潔なものだ。

なぜなら。吉井明久を演じる彼は

ただ、分の悪い賭けというものが好きなだけなのだから。

『勝てる訳がない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんさえいればなにもいらない』

硬直が解けるなり、今度は非難轟々の嵐が訪れる。Fクラスの学力を鑑みれば当然のことだろう。それでも不敵な笑みを絶やさず、目を閉じてクラスメイトの非難を一身に受ける雄二から目を離し、明久は瑞希に自分の疑問を聞いた。

「『ねえ姫路ちゃん』『試験召喚戦争』ってなに？」

「あ、はい。えつとですね、要点をまとめると生徒一人につき召喚獣を一匹所持していて、その子達を戦わせるというクラス対抗戦のことです。あ、詳しいことが書いてあるプリントがありますよ」

もしこの質問を瑞希以外の生徒に問うたなら「お前一年間何してた

の「的ニュアンスの言葉がバカという単語付きで返ってきたことだろう。そう考えると、明久の人選もなかなかのものだ。

ぶっちゃけてしまえば、むさ苦しい男より美少女のほうがいいという下心故なのだが。

明久は瑞希から試験召喚戦争についてのルールやその他の詳細が書かれたプリントを受け取ると、礼を言うなり無言で読解に移った。それと同時に組んでいた腕を解き、雄二が教卓に手を突いて目を開ける。

「そんなことはない。俺が勝たせてみせる」

この学園にはFクラスとAクラス合わせて6組のクラスが存在する。それは学力順に振り分けられており、単純計算でも学力差、すなわち戦力差は6倍にもなる計算だ。

そんな絶望的かつ圧倒的な数値を見せられても、雄二が揺らぐことはない。

そんなものは所詮数値であると、そう高らかに宣言する。

『何をバカなことを』

『できる訳がないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

その力強い言葉を耳にしても、やはり否定的な思考は拭い切れない。当然だ。ここまででは、この宣戦布告は迷言以外の何物でもない。

「根拠？根拠なら充分にこのクラスには揃っているさ」

『『『え？』『』』』

「今からそれを証明してやろう」

故に、雄二は具体的な今ある戦力を分析する。言葉だけでは頼りないのなら、実際に根拠となることを見せてやればいいのだ。

「おい康太。畳に張り付いて姫路のスカートを覗いてないでこっちにこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

土屋康太。先ほど明久に三点リーダーくんと名付けられた男子生徒が飛び起き、必死に否定のポーズを取る。この構図を明久が見れば便乗するのは間違いないのだが、幸い彼はプリントに釘付けだった。

そんな彼をさておいて、教壇に上がった康太と呼ばれる生徒を雄二が紹介する。

自己紹介では明かされることのなかった、彼の裏の顔を。

「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙^{ムツリーニ}なる性職者だ」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前は、実はあまり一般に知れ渡っていない。しかし今雄二が口にしたムツリーニという名前は、一転して男子からは畏怖と畏敬の念を、女子からは軽蔑の目を向けられている。故に、その事実を聞かされたＦクラスは戦慄した。

『バカな……………奴が、あの……………ッ！？』

『見る……………！くつきりと残った畳の跡を必死に隠そうとしている……………ッ！！』

『ああ……………！ムツツリの名に恥じない姿だぜ……………ッ！！』

早い話がムツツリスケベである。三点リーダーを多用するなど、実にノリのいいクラスだった。

「姫路のことはみんなその実力をよく知っているはずだ」

「え？わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待しているぞ」

姫路瑞希。その学力は先ほど話題になった通り、学年次席というズバ抜けたものを持っている。Fクラスにとって全ての分野において綺羅星のごとく輝く彼女がいれば、相当の戦力になるのは明白だ。

『そうだ！姫路さんがいるんだった！』

『ああ、彼女ならAクラスにも引けを取らないぞ！』

『さすが姫路さんだ。彼女さえいれば何もいらないな』

見る見る内に上がっていく土気。その光景を雄二は満足そうに見遣り、さらに畳み掛ける。

「それに、木下秀吉だっている」

「んむ？ワシもかの？」

木下秀吉。学力ではあまりその名を耳にすることはないが、他のことで彼は有名だ。

——にもかかわらず、教室は一瞬にして水を打ったような静寂が訪れた。

「『なるほどね』『大体理解したよ』『要はAクラスを蹴落として設備を奪うってことだよね』」

そんな中、間の抜けた声がやけに耳につく。先ほど名前を挙げられた明久だ。彼はいかにも面倒くさいと表情で語り、立ち上がった。

「『僕はやだなあ』『そんな野蛮なこと、ゴリ本くんだけでやってくれよ』『戦争なんてバカげたことをなんでわざわざしなくちゃならないのさ?』『そもそもAクラスだぜ?』『たとえ今雄二くんが挙げた人の尽力があっても所詮それは「Fクラスの中で」って言葉で片付けられるのさ』『言いたいことがわかるかい?』『Aクラスは誰一人欠けることなく成績のいい粒揃いだ』『そりやそうだよね』『途中退席するだけで0点扱いにされる厳しいテストの中から勝ち残った人しかいないんだから』『それに比べて僕達Fクラスはどうだい?』『例えるならそうだな』『雄二くん』『君は手にあるたくさんの水風船と高性能な水鉄砲だけで海の大波に立ち向かうと思うかい?』『僕は普通、普通じゃないけど思わないよ』『無理は言わない』『やめちまえよそんなこと。』」

饒舌。まさにその言葉がピッタリはまるほど、明久の弁論は滑るように口から流れてくる。その後ろ向きな考えから、Fクラスの教室はさっきの震えが嘘のように静まっていた。

誰もが戦意を削がれているにもかかわらず、明久は

「『だからこそ』 Aクラスを負かしてやろうじゃないか。』」

自分の参戦を表明した。

「……ほう？なぜだ？明久」

ざわめくFクラスに、教壇に立つ雄二とちゃぶ台に登った明久の視線が交錯する。その構図は、まさしく信頼し合う親友そのものだ。

いや、正確に言うならば信頼しているのは雄二のほうだけだ。明久はただ、自分のやりたいことをやるだけ。

それを、雄二は前向きなものと信用しているのだ。

「『決めてるんだ。』 『僕は戦いになったら一番弱い立場の子の味

方をするつて。』『なんだい？この空気は？』『なんだい？この設備は？』『なんだい？この環境はさあ？』『こんな廃屋じみたところに押し込まれて病気にでもなったらどうするんだい？』『残念ながら、男としてそんな事態はほつとけないな。』

明久の言葉に、女子二人を除いた男子全員が失った戦意を取り戻していく。そうだ、自分達ならまだ我慢できるが、姫路や島田は病気になるてしまう可能性が充分にある。このクラスの華を失わないためにも、Aクラスを打倒しなければならない、と。

不純だろう。戦争の理由が女子のためなど、不純という言葉一つで表すことができる。

だが。

「『不純で何が悪いんだい？』」

明久は、そんなものは関係ないと断言する。そんなもので、自分が止まることはないと宣言する。

「『僕は悪くない。』『悪いのは僕達じゃないだろう？』『正義悪倫理常識建前哲学有利不利欲望命その他諸々一切関係なく。』『た

だ、か弱き者を守るために！」

凜とした表情は、ほんの少しだけどこかの女子生徒会長を彷彿とさせた。だが、それも一瞬のこと。再び不敵な表情に戻した明久は、静かな水面を思わせるような声で、ただ自分の願望を告げた。

「『引つ掻き回してやろうぜ。』この腐った学園を。」

次の瞬間、沈黙していたFクラスが力強い雄叫びをあげた。

何者にも止められない勢いと、信念を乗せて。

「それじゃあ明久。まずはDクラスだ！宣戦布告をしてこい。無事大役を果たせ！」

「『それはやだ』」

「……参ったな」（前書き）

バカテスト・化学

第五問

問 『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久のコメント

『簡単すぎるので』『敢えて書きませんでしたー』

教師のコメント

もつとなめている生徒がいたとは。では難関大学クラスの問題集を用意しておきますので、あとで職員室に来るように。

「……参ったな」

結局、Dクラスへの宣戦布告は押し切られた明久と自ら志願した美波が二人で行くこととなった。雄二が言うには問題ない、俺を信じろ、騙されたと思って行ってこい、などの一点張りで、確かに漫画やドラマのように危険な目に遭うとは限らない。だが、それ以前に明久はただ面倒くさがっていた。

「ほら吉井！さっさと歩く！」

「『はーめんどくさい』』ていうか島田ちゃんだけで行けばよかったじゃない』』どうして僕まで巻き込むのさ？』』」

先ほどの一件が尾を引いているせいか、美波に対して明久が胸を高まらせるようなこともなくなっていた。彼は惚れやすいのと同様、冷めやすい性格らしい。

「だ、だってこういうのってドラマとかでは大抵ひどい目に遭うじゃない。一人だと何かと危険でしょ？」

むしろこの二人だと僕が危険だ、と明久は心の中で小さくぼやく。

もはや明久の美波へのイメージはパワーファイターやキックボクサーなどの職業にクラスアップしたようだ。天は人に二物を与えず、という言葉が不意に頭の片隅をよぎる明久だった。

「『じゃあなんでわざわざ立候補したのさ?』『僕は一人でも行くつもりだったんだぜ?』『むしろ一人のがよかったかも』」

「……だつて」

ぶう、と美波が頬を膨らませる。不満げな表情だ。

「坂本はウチを戦力扱いしなかったんだもん……なら、他のことで役に立つしかないでしょ?」

「『あーそつか』『オチ扱いもマスコット扱いもしてくれなかったよねえ』『まったく雄二くんも人が悪いよ』」

もしも、吉井明久ではなく球磨川楔のほうの人格を知る人物がこの光景を見れば、きっと首を傾げたことだろう。いや、人によれば嫌悪したり歓喜したりと様々であろうが、疑問に思うことはまず間違いない。

事実、この球磨川楔という人物はここまで人に友好的に接したりはしなかった。しかし、それは過去形である。彼が以前に属していた

生徒会では、彼は一人の女の子のために命を惜しまなかった。それは、革命的な変化であろう。

確かに、彼は過負荷^{マイナス}という人種だ。そんな人物が、自分の中で決めているという理由だけで命を投げ捨てることがだろうか。かつての彼では見ることでできなかった、革命的な変化。

人は、それを改心と呼ぶ。

だが、吉井明久の皮を被った球磨川楔がその言葉に当て嵌まるかどうかは定かではない。吉井明久という人格と球磨川楔という人格が入り混じっている、という可能性も0ではないのだ。それは決して改心とは認められない。

故に、彼が改心したかどうかの答えはわからない。まさに謎に包まれている。

「『2・D……』 うん、ここだね」

だが、彼は考えることをよしとしなかった。

謎であるなら、謎のままでもいい。

自分のいた世界に戻れないなら、別にそれでもいい。

彼の目的は、桜並木を歩いた時と同様、今も変わらない。

『真人間を目指す』

球磨川楔は、もしかすると、とっくに『改心』をしているのかもしれない。

「『じゃあ島田ちゃん頑張ってきてね』『僕も頑張って応援してるから』」

「ちょ、ちょっと！こういうのは男子の仕事でしょ！？」

「『やだなあ島田ちゃん何言ってるのさ』『男子なら僕の目の前にぐぶあつ！』『ちょ、パーで内臓にダメージ与えるのやめてよ！』『てかそれ掌底っていうんだけど！？』『』」

「吉井がバカなこと言うからでしょ！ウチはれっきとした女子なんだから！Dクラスに宣戦布告しないと戦争にならないじゃない！」

「『けほっけほっ』『うーん、でもなあ』『ほら、絶対襲って来そうじゃない？』『』」

「ま、まあドラマとかではそうね……じゃあ、宣戦布告してすぐ逃げる……とか？」

「『うーん』『雄二くんは相手の同意を取ってこいって言ったしねえ』『まあいいや』『僕は早くだったらしたいから行くけど』『島田ちゃんはどうする？』」

「う……。い、行く」

「『オッケー了解』『じゃ、女の子に危険が及ばないようにしないとね』」

渡り廊下の先、目の前にある一般的な教室のドアを一思いに開ける。ガラッという音が教室の喧騒を掻き消し、Dクラスの生徒の視線が遠慮会釈なく明久達に集中した。雑談などの音響がにわかに静まり、美波はその視線に若干怖じけづいたが、明久はまったく気にした様子はない。

ドアと同様、至って普通の教室にカツカツという足音がリノリウムの床に一人分だけ響く。足音は教壇へと向かっているようで、ゆっくりにゆったり音を刻み、それがまたクラスの注目を集めていた。誰だあいつ、などの疑問がひそひそと飛び交うが、それらの声は明久の放つ足音の音量には遠く及ばない。声を出してはいけないような夜の闇が醸し出すような厳かな空気が漂う中、まるで長い時間が過ぎたような感覚で教卓の前に辿り着いた明久は、

「『えー』『モブキャラのみなさんこんにちは』」

Dクラスの心を、ポツキー感覚でさくつとへし折った。

『『ぎゃあああああああああ——つつ——!!——!!——!!——!!』』
『』

「『どうしたんですかモブキャラのみなさん!』『最初で最後の出番なのに!』」

『『『ぐぎゃあああああああ——つつ——!!——!!——!!——!!』』
『』

「『所詮やられ役だからなんだっていうんですか!』『せいぜい潔くやられて経験値になってくださいよ!』」

『『『うぎゃあああああああ——っつ！！！！！！！』』』

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。ある者は首を掻きむしり、またある者は体を痙攣させるなど、Dクラスの精神がもはや廃人状態にまで落ち込む。もう死にたいどうせ俺らは脇役だ生まれ変わったら微生物になろう、と生きる気力すらなくした惨憺たる状況のDクラス。

「エグいわね……」

この戦争が終わったら、Dクラスには改めて謝罪をしようと思う美波だった。ともあれ、これで安全に宣戦布告ができそうだ。明久の下へ駆け寄る美波だが、明久の視線が異常なほど一点を凝視していることに気づく。

「吉井、どうしたの？」

「『……参ったな』『どうやら、モブキャラの集団って訳じゃなかったみたいだ』」

同じく教壇に着いた美波が明久の視線を追う。その先には、死屍累々といった惨状の中で床に突っ伏す生徒がほとんどにもかかわらず、明久の精神攻撃をもともせず直立している生徒が——二人。

「お姉様あー！美春に会いに来てくださったんですねー！」

「み、美春！？あんたDクラスだったの！？」

片方はルパンダイブさながらに美波に抱き着く縦ロールの女子生徒。先ほどの発言で明久はどんなキャラか納得したが、もう一人の生徒がどんなキャラを持っているかは未だ見抜けていなかった。

見た目は地味の王道を極めたような、黒髪に三つ編みの女子生徒だった。だが、その目に宿している光が他のDクラスの連中とは明らかに異なる。爛々と輝かせた目が映しているのは、当然目が合った状態の明久だろう。まるで、彼女の瞳は明久しか映していないような、他のことはまるで興味ないといった感じの目。隣で繰り広げられている美春と美波の攻防を放置したまま、明久は彼女の開いた口に耳を傾け、

「か……可愛い……」

「『逃げよう島田ちゃん』『このクラスはマジでやばい』」

ドアに駆け出した。

「ちょ、ちよつと吉井!?ま、待ちなさいよ!」

「お姉様!逃がしません!」

「待つて!そこの女の——男の娘!もつとよく顔を見せて!」

「『くつそお!』『そういうキャラかよ濃いにも程があると思うんだけどなあ!』」

Dクラスから出てきた二人を追うように、すぐさま教室から先ほどの二人が飛び出す。異色の鬼ごっこが始まった瞬間、明久と美波は全速力で力の限り走り出した。

「……参ったな」（後書き）

誤字が多いなと自分でもつくづく思います。指摘のたびに修正を加えますので、感想と合わせて教えていただけると助かります。

「知るかよそんなこと」(前書き)

バカテスト・英語

第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - abnormal - infinity!』

教師のコメント

程度を書け、と言った訳ではありません。そしてちゃっかりテンションを上げないでください。

土屋康太の答え

『b a d - b u t t e r - b u s t 』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

須川亮の答え

『b u s t ! - b u r s t ! ! - b e a s t ! ! ! 』

教師のコメント

『おっぱい』『…したくてうずうずしている』『獣』。まさにあなたのことですね。姫路さんの身が心配でなりません。

「知るかよそんなこと」

――10分後。

「『あははー』『今日の美波ちゃんもかわいーなー!』」

「も、もー、何言ってるのよー、あ、アキー」

仲睦まじい恋人のような雰囲気や言葉を交わす明久達を、Dクラスの二人が絶望した目で見るという状況が出来上がっていた。二人はそれこそ恋人がするように手を握り、ついでに汗も握ってこちらを見つめてくるDクラスの二人の様子を伺っている。いや、美波に至っては顔を赤くして明久の顔もチラチラと伺っているようだった。その姿はまさしく恋する乙女そのものである。

そもそも、一体なぜこんな状況に陥ったのか。

それは10分前に遡る――

「『ねえ、島田ちゃん』 相談が、あるんだけどっ」

「なに！？何か思いついたの吉井！？」

絶賛校内フルマラソン中の二人。実に春らしく健康にもよさそうだが、後ろから迫る先ほどの女子二人に追いかけられているせいでそんな平和的なものではないのは明らかだろう。もしこの光景をフクリスの誰かに見つかりでもすれば第一級異端者の称号まで与えられてしまう。その先に待つのは天国に住まうおじいちゃんとの再会しかない。

背後に冷たいものが流れる中、必死に明久は走り、なんとしても生き残るために自分の考案した策を伝えた。

「『二手に別れるんだ』 そのほうが絶対に安全だよ』」

「二手のほうが安全？なんで！？」

「『だって僕には』『男子トイレっていう心強い味方がいるからね！』『じゃ、そういうことで！』」

「ま、待ちなさい吉井！あんた自分だけ助かる気！？」

「『大丈夫さ島田ちゃん！』『僕は君の屍を越えていく！』」

「それ普通逆よね！？『俺の屍を越えていけ！』『じゃないの！？』」

「『あつはつはー！』『ドラマの見すぎだぜ島田ちゃん！』『少年ジャンプじゃあるまいし』『リアルでそんな台詞期待するもんじゃないぜ！』」

「こ、このゲス野郎！」

「『あはははは！』『最高の褒め言葉ありがとう！』『恨むならドラマじゃなくてジャンプを見なかった自分を、』」

『お姉様と肩を揃えて走るなんて……！許せません！待ちなさいそのブタ野郎！』

『と、トイレ！？う、うん！私、そういうの初めてだけど、頑張るね！一生懸命頑張るから！』

「二手に別れるのね？じゃっ、幸運を祈るわ吉井」

「『待つてえー！』『お願い一人にしないでえー！』『あの人が絶対やばいよ！』『肉体的にも精神的にも殺されちゃう！』」

縦ロールの女子は美波を、三つ編みの女子は自分を考えていた明久だったが、いつの間にか縦ロールの女子の標的が変更されていたらしい。三つ編みの女子はトイレまで追いかけてくる気で、何を頑張るのか明久は戦慄しっぱなしだった。とりあえず男の尊厳が打ち砕かれるのは確実だろう。囿にこそされかけたものの、さすがに不憫に思えた美波はほぼ半泣きの明久の隣についていていた。

「で、どうするのよ吉井。もう策はないの？」

「『えーっと』『あ、このまま逃げ続けるとか』」

「どこまでも追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『うぐっ』『あ、どこかに隠れよう！』」

「匂いで追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『ぬぐぐ』あ、Fクラスに戻ればいいんじゃない！？」

「ところ構わず追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『君ら二人ツツコミどころが多すぎるぜ！？』」

誰よりも苦勞している美波だった。

「……ね、ねえ吉井。ウチに任せてみない？」

「『え？』島田ちゃんに？」

「ちよ、ちよつと提案があるんだけど！……乗ってみる？」

提案があるだけでなんでそんなにどもるんだろう、と思った明久だが、自分の考えた策は先ほど無惨に散ったばかりだ。他に思いつく考えもなし、それに、走り始めて10分が経過しようとしているにもかかわらず、後ろの二人は息切れすら——否、息切れはしているようだ。だが、明久にはそれが疲労からではなく興奮から息切れ

しているように思えてならなかった。もはやトラウマ級の恐怖である。

美波の提案に、さすがに体力の限界が近づいてきた明久は頷いて肯定の意を示す。後ろの二人に聞こえないよう耳打ちしてきた美波の口から出た提案は、まさしく賭けと呼ぶべきものだった。

「『……マジで？』」

「そ、それしかないでしょ！？嫌なら別に——」

「『いや、やろう』『そろそろ体力の限界だしね』」

「『……じゃ、じゃあ。予定、通りに』」

こくりと頷く明久。その直後、明久と美波は立ち止まり、後ろを向いて声を張り上げた。

「『その二人、止まれ！』」

「ブタ野郎風情が美春に命令しないでください！」

「ねえその男の娘！何て言うお名前なの！？」

「『止まってよ！』『せつかくクライマックスっぽく言ったのに！』『もうやだ君ら！』」

「二人とも、止まりなさいっ！」

美波の言葉でようやくブレーキをかけるDクラス二人。その隙に、すかさず美波は声を重ねる。

「二人とも、ウチらを追いかけるのはもうやめて。美春も、そのあなたも」

「どうしてわかってくれないのですお姉様！美春はこんなにもお姉様を愛しておりますのに！」

「やだもん！その娘は私がお持ち帰りして蠟人形にして一生の宝物にするんだから！」

「『怖っ！！』『それ殺人だよ！』『僕の人権どこ行つたのさ！？』」

「吉井……じゃ、なくて……。あ、アキ！少し静かにしてて」

美波のその言葉に、Dクラスの二人の動きがピタリと止まる。自分の耳にしたことが信じられないのか、胡乱な目が眼前の男子生徒と女子生徒の間をさまよう。

その様子を見た美波は、意を決したように明久の手を握り、

「だ、だってウチとアキは……、つ、付き合ってるんだから！」

爆弾を、投下した。

——そして、今に至る。

予想通り、効果はてき面。Dクラスの二人は世界の終わりを目の前で見たような表情で明久と美波の睦まじい姿を凝視している。どうやら美波の『恋人のフリ』作戦は成功したようだ。

とはいうものの、さすがにこうして手を繋ぐ様をジロジロ見られるのは好きではない。というか、恥ずかしい。さっさとこの場から逃げようと、美波は最後に締め括る。

「じゃ、じゃあそういうことだから！もう追いかけて来ないでね」

「ま、待ってくださいお姉様！なら、美春とのあの夜は遊びだったんですか！？」

「変な言い方しないでよ！？別に何もしてないでしょ！？」

「いいえ！お姉様はいつも美春がベッドに横になると甘い言葉をかけてくれました！それも毎日！」

「妄想！それ妄想だから！夢と現実の区別くらいはつきりしてよ！？」

「そつだよその男の娘！私のこの気持ちはどこにぶつけばいいの！？」

「『知るかよそんなこと』 『その壁にでもぶつけられ？』」

「そつじゃないと私……！あなたを殺して蠟人形にするっ！」

「『だから怖いよ！』 『しかもあなたを殺して、の後って』私も死ぬ！』じゃないの！？』 『ちゃっかりやりたいことやっちゃってるよ！』」

「とにかく！二人とも、もう追いかけるのはやめて！行く、あ、アキ」

その言葉で、今度は硬直を通り超して石化状態で立ち尽くすDクラス
の二人を置いて歩き出す。後ろから追いかけてくるような足音も
呼び止める声もなかったが、未だ手を繋いだままの二人は盛大にた
め息を吐き、自分のクラスへ足取り重く引き返していくのだった。

「で、宣戦布告はしてきたのか？」

「……あ」

「『その前に一発殴らせる』」

結局、Dクラスへの宣戦布告は明久にジジイ口調くんと命名された秀吉が行き、屍状態継続中のDクラス代表からあっさりと同意を得たのだった。

「……それより二人とも、なんだか仲良くなってませんか？」

「『え？』『むしろ悪くなった気しかないよ』『でしょ？美波ちゃん』」

「え、あ、そ、そうね、アキ」

「……おれにだけ」

「知るかよそんなこと」(後書き)

総合評価が1000ptに…感極まる、とはこのことでしょうか。
これからもよろしく願います！

「君つてもしかして」(前書き)

バカテスト・保健体育

第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は()を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『女の子の日』 『早い話が生理ですね』

教師のコメント

惜しいですが、不正解です。それより一度はぐらかしたのになぜ直球で言ってしまったのですか？

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

工藤愛子の答え

『生まれて初めての月経、すなわち生理のことで、一般的には初潮、医学用語では初経と呼ばれるもの。古くは初花とも呼ばれ、初潮の数ヶ月前から透明または白色の帯下の増加が見られるようになった後、初潮が発生する。初潮は日本人の平均は12.4歳で、大部分は10歳から15歳の間、身長伸びが低くなり始めたところに発生することが多いが、早い場合で8歳、遅い場合で16歳以上で発生する例もある』

教師のコメント

あなたたち二人、詳しいのは結構ですが、これを書く時間があるなら一問でも多く回答しようと思わないのでしょうか。それに回答欄

に合致していないので不正解となります。

「君ってもしかして」

屋上。

日光を遮る遮蔽物がないせいか、その場所はポカポカという春特有の陽気に包まれていた。時折吹き付けるそよ風は南の島からやってきたもので、寒くもなく暑くもない、春という過ごしやすい季節の天候を最大限に表現している。そんな麗らかで、眩しい光の中、雄二によってミーティングと称された作戦会議が開かれていた。

「『で？』 雄二くんはどうやってDクラスを屈服させる気かな？」
「わくてかわくてか」

ちなみにこの作戦会議には明久も参加しているのだが、彼にしては珍しく面倒くさがらずに大人しくついてきていた。早く試験召喚戦争というものを体験してみたいからか、雄二の作戦というものに興味津々のせいかな、はたまたFクラスに火を点けた責任のためか。最後者だけはないと断言できるだろう。

何はともあれ、彼はこの戦争に、至って積極的な姿勢で取り組んでいた。

「今から話す。それより秀吉、開戦時刻はいつに設定してきた？」

「一応、今日の午後と告げて来たぞい。ちゃんと同意も取ったのじや」

屋上のフェンスに腰を下ろす雄二の質問に、同じくコンクリートの地面に座る秀吉が応答する。彼の口ぶりから、例の女子二人はDクラスに戻ってきていないらしい。

「『ま、君の容姿ならDクラスに襲われることはまずないだろうね』
『別の意味で襲われそうだけど』」

「んむ？明久、どういう意味じゃ？」

「『蠟人形のコレクションがまた一つ増えそうだ』
『ってコトだけ言っとくよ』
『ハア……』」

「ハア……」

「????」

「あ、あの。二人とも、何かあったんですか？」

純粹に心配しているらしい瑞希に質問され、苦虫を噛み潰したような顔をする明久と美波。Dクラス戦の前からいきなり戦意を削り取られている二人である。

「……………何かあった？」

「『ちよつとねえ…………』 『縦ロールと三つ編みの女子に追い立てられてさ』 『死線を越えてきたところだよ』」

「縦ロール？…………おい明久、そいつの口癖は？」

「『お姉様とブタ野郎』」

「清水か」

即答だった。美波に飛び掛かってきたりと、どうやらそつち系に定評のある人物らしい。ぜひと関係わり合いになりたくないと感じる明久。今度襲われたら美波ちゃんを囷にしようと心に誓うのだった。

「だが、三つ編みの女子は聞いたことがないな…………お前はそいつに追いかけていたのか？」

「『まあね』『ホント殺されそうな勢いだっただよ』」

「そうか。……康太」

「……………（コクリ）」

雄二が康太に目配せをする。調べておけ、ということだろうか。確かに躊躇なく人を蠟人形にするつもりだったりと、危険人物に変わりはない。

それにしても、目配せだけで言いたいことが伝わるなんて随分仲が良いんだな、と明久は思う。以前の吉井明久ならできたのかもしれないが、今の自分では到底不可能だろう。そんなことを考え、明久は太陽に限らず眩しげに目を細め、夢げに微笑んだ。

「それはそうと……午後からってことはお昼ご飯を挟むのね？坂本」

「ああ、そうなるな。明久、今日の昼くらいはまともなもん食べろよ？」

「『ああ、それなら大丈夫さ』『昼に限らず、今日はちゃんと割り箸を食べてきたからね』」

「待て明久。お前の中の『まともな食べ物』の定義を教えてください。
一瞬本気で耳を疑ったぞ」

「え、ええっ！？吉井くんって——割り箸が主食なんですかっ！
？」

「おかしいのう……姫路の台詞で涙が出てきたのじゃ……」

「……………強く、生きろ……………っ！明久……………っ！！」

「『あははー』『同情するならメシくれメシ』」

和んだ空気が一転、葬式みたいな雰囲気になで落ち込む。怒涛の勢いで同情されている明久だった。

「食費がないとは言え……人類の可能性には目を見張るものがある
な……………」

人類の限界に挑戦する明久だった。

「……………あの、よかったら私がお弁当を作ってきていいですか？」

「『え？』 姫路ちゃんか？』」

「はい。その……やっぱり心配ですし……」

「『うわマジで！？』 『やっぴい夢の女の子のお弁当じゃん！』」
「んじゃ早速明日の昼ねー！』」

「アキ……よかったね…… ホント、よかったわね……！」

「明久……！ちゃんと味わって食べるんじゃぞ……！」

「『あーっん』 とりあえずその戦場からの生還者扱いするのやめるー？』」

割り箸おいしいのになーと心の中で呟く。今度割り箸のフルコースを振る舞ってやろうと考える明久だった。まったくもって迷惑極まりない。

「……………殺したい程、妬ましい……………！」

「あ、それなら、皆さんにも……」

「俺達にも？いいのか？」

「は、はい！迷惑じゃなければ……」

「おお、それは楽しみじゃのう」

「……………！（コクコク！）」

「『ちえー』『ま、僕だけじゃないっていうのは残念だけど』『じや僕も割り箸弁当を作って、』」

「それは迷惑だ」

「それは迷惑よ」

「それは迷惑じゃ」

「……………迷惑」

「『わーい清々しい程全否定』『君達好きだぜー』」

「あはは……」

困ったような、それでいて実に楽しそうな瑞希の笑顔が花開く。春の陽気に彼女の笑顔は、やはりその人を和ませる雰囲気故だろうか、驚く程似合っている。その様子を見た明久は、前々から感じていた疑問を聞いてみることにした。

「『ねえ姫路ちゃん』『君ってもしかして』『頼み事は断れないタイプ?』」

「え? あ、えっと……はい。どうしてもそうというのは……」

「『ふーん』『そうなんだ』」

顎に手をやり、ふむふむと頷く明久。それを瑞希は不思議そうな目で見てみると、不意に顔を上げた明久と視線が衝突する。次いで、明久の口から出た言葉は、

「『じゃあ姫路ちゃん』『明日から裸エプロンで』『僕に傳け』」

和やかな空気を一瞬で凍らせた。

「……………?」

春にもかかわらず極寒のブリザードが屋上一帯に吹き荒れる中、明久の言葉が脳に伝わっていないのか、可愛らしく首を捻る瑞希。唯一状況を理解していない彼女を差し置いて、ようやく凍った空気が氷解する。それと同時に、混乱の極みが屋上を支配した。

「アキいっ！！あんたなん、ななな、なんちゅーこと頼んでるのよおおっ！！？?」

「『いや!』『いやいや違うんだ美波ちゃん!』『僕はただ頼み事を断れないなら裸エプロンになってほしいって思っただけで!』」

「そっちのほうか余計悪いに決まってるでしょおっ!?!」

「あ、明久!!それはさすがにどうかと思うぞい!?!」

「……………絶対許さない……………!!」

「明久……お前は時々俺の想像を超える人間になるな……。ってかよく『傳く』なんて言葉知ってたな」

ガクガクと明久の襟首を揺さぶる美波に焦った様子で迫る秀吉、文房具を取り出す康太、呆れてるのか感心してるのかわからない雄二と、状況が一気に混沌としたものへと陥る。明久に至っては美波にされるがまま状態で、目を回して気絶しているようだ。当然の報いと言わざるを得ない。

そんな中、戸惑った風の瑞希が疑問の声を上げた。

「あの……裸エプロンってなんですか？」

「……姫路さんマジ純粹いい——っ!!」「」「」

姫路瑞希。Fクラスに舞い降りた天使と呼ばれ、学年次席の成績を持つ才女である。

「ふう……。さて、話が180度逸れたな。明久は気絶してやがるが、本題に戻るとしよう」

仕切り直すように平然と明久の上に座る雄二が話を持ち出す。気絶している明久は実に幸せそうな笑顔だ。どうせ裸エプロンの夢でも見てるんだろう、と瑞希以外のメンバーが心配することはなかった。

「そういえば雄二よ、一つ気になっておったことがあるんじゃないが、どうしてDクラスなんじゃ？ 段階を踏むならEクラスじゃし、ワシらの目標はAクラスじゃろう？」

「あ、そういえばそうですね」

打倒Aクラス。そんな目標を掲げているにもかかわらず、雄二が宣戦布告を命じたのはDクラスだ。順番的におかしいし、なぜAクラスに戦争を仕掛けないのか疑問に思うのは当然だろう。

「理由はいろいろあるが、Eクラスを攻めないのは戦うまでもない相手だからだ。振り分け試験こそ体調不良だったが、姫路に問題が

ない今、Eクラスには絶対勝てる」

「じゃあ、Dクラスは危ないってことなの？」

「確實、とは言えないが、Aクラスを打倒するために必要なプロセスだ。そのために、姫路と康太の力はかなり重要になってくる。島田と秀吉はその補佐だな」

了解、と言うように全員が頷く。それを目にした瑞希は、兼ねてからの不明瞭な点を雄二に質問した。

「あの、坂本くん。ちょっといいですか？」

「ん？なんだ？姫路」

「吉井くんの役割は何でしょう？それと、さっきも言ってた『観察処分者』ってどういうものなんですか？」

「ああ、ダークホース姫路は知らないのか。とりあえず、こいつの役割は——
伏兵だ」

「伏兵……ですか？」

「……………やっぱり、物に触れるから？」

「それもある。姫路、後者の質問だが、『観察処分者』とは教師に目を付けられて召喚獣で雑用係を強要させられる生徒のことだ。そのために物に触れるよう調節されているらしいんだが、これがかなり役に立つ。明久の言った通り、こいつには戦場を引っ掻き回してもらうつもりだ」

「それってすごいですね！召喚獣って見た目よりずっと力持ちらしいですし」

キラキラとした視線を明久に送る。問題児扱いされているだけということに気づいていない瑞希は相当の天然だろう。

「『なるほど』『伏兵、ね』」

ある程度話が済んだところではちつと目を開ける明久。口ぶりから推測すると、どうやらそこそこ前から目が覚め、話に耳を傾けていたらしい。その表情は細めた目と微笑を湛え、

「『そりゃあいいや』 『伏兵……いい響きじゃない』 『異質で愚劣で性根の腐った役立たず^{マイナス}である僕にとって』 『実を射た役職だぜ』」

歪んだ口元が、この試験召喚戦争を暴風雨ながら荒れに荒れさせることを、暗に予告していた。

机上の空論

鮮やかな夕焼けだった。

太陽が沈む時間帯特有の赤い光は夕日の赤と青い空のコントラストを生み、見る者を惹き付けるような美しさを孕んでいる。ガラスの窓を突き抜けるその光は学校内部にまで侵入し、無音の生徒玄関を明るく照らしていた。

放課後の学校とはかくも淋しく、空っぽな場所である。無垢な生徒によつて賑やかな音を立てる訳でもなく、子供達が走り回るような朗らかな絵を映し出す訳でもなく、生徒の笑い声が明るく響く学校の裏面が顕著に表れていた。外のグラウンドからも何の声も聞こえない、音を失ったような場所。

「『うーん』『こりやまいったなあ』」

そんな廃れた学校から、今まさに出て行こうとする生徒がいた。自分の下駄箱に顔をつっ込み、落ち着かない様子だ。

彼の名前は吉井明久。この小学校に通う生徒の一人で、至って普通の小学生だ。少なくとも、自分では普通だと思っている。

だが、それは大いなる勘違いだった。普通の小学生は括弧付けた喋り方などしない、総じて無垢なものだ。さらに、彼に接するだけで体に巢喰い、蝕むような濃密すぎる嫌悪感が彼を圧倒的な『特異』へと至らしめていた。

それを他の生徒は敏感に感じ取ったのだろう。この時期の子供達は周囲のことにとても敏感だ。敏感で、好奇心旺盛で、残酷である。自分のしでかすことの重要性、相手が受ける痛み、罪深き者を裁く法律。それらを知らないが故の残酷が、子供達には備わっているのだ。

事実、明久の覗く下駄箱には彼の靴が入っており、靴の中には画鋲が仕込まれていた。早い話がイジメである。

明久のその特異さを恐怖して及んだ行為だろう、自分達とは明らかに異質な明久を目にして、敏感な子供達は恐怖故に、無知故に迫害していた。鉛筆を全て折り、ノートに誹謗中傷の限りを尽くし、靴に画鋲を仕込んだりと、思い当たるイジメの所業は大抵試した。

それでも、明久は笑みを崩さなかった。

彼は靴の中に潜む悪意を愛おしそうに見つめ、

「『早く帰らないと、お母さんに叱られちゃうよ』」

そのまま、画鋏入りの靴を履いて、帰路に着いた。

この純粋な悪意にいち早く気づいたのは、彼の担任である生徒達に人気の女性の先生だった。彼女は折れた鉛筆や明久のノートを見て、イジメを受けていることを知ったのだ。

その事実を知った彼女は、明久のノートを片手に自分のクラス全員を叱り付けた。

『イジメなんてこと、絶対にしてはいけません！』

それっきり、明久へのイジメはピタリと止んだ。イジメていた子供達にとっても、明久への恐怖心は日に日に増大していったのだろう。

イジメはその日をもって終結を迎え、今度はクラス全員での無視が始まった。だが、先のイジメと異なる点を上げるとすれば——それは、『嫌悪』からではなく、『恐怖』からの行為だということだろう。それでも明久は平然とクラスメイトに挨拶をするし、気さくに話し掛けたりもした。子供達はそんな明久の心情が理解できず、溝は深まるばかりだった。

決定的だったのは体育の時間での出来事だろう。その状況を改善したいと考えていた女性教師は、その時間にあらかじめ決めてあったペアで体育前のストレッチをさせた。

最初の明久の相手は少しぼつちやりとしていて、桜色の髪が眩しい女子だった。彼女も同じくその体型のせいでイジメを受けていて、同族のよしみ故か、彼女は明久との会話に弾んだ声で応答していた。その光景を、クラス全員が盗み見していると知らずに。

次の体育の時間、明久のペアはかつて明久をイジメていた男子だった。当然、ペアになっただけで溝が埋まる訳ではない。彼は面白くなさそうな顔で、他のペアのストレッチを見ていた、その時だった。

自分の右腕に違和感を感じ、目をやると、

夥しいまでの螺子が突き刺さっていた。

絶叫が体育館に響き渡り、鼓膜をつんざく。自分の右腕を押さえ、激痛に顔を歪める彼を見て、明久はその時期の子供達が見せるような笑顔で微笑んだ。

次の日から担任の女性教師は毎日放課後に明久とお話という名目の

相談に乗ることにした。

その日聞いたことは、なぜあんなことをしたのかということ。あんなこととは、当然体育での出来事だ。彼女の優しく諭すような質問に、明久は微笑みながらこう言った。

「『だって、こーちゃん面白くなさそうな顔してたから。』『だから、僕がされて楽しいことをしてあげたんです。』」

彼女は二の句が告げなかった。

その日はそれでお開きとなり、次の日。どうすれば明久を正常に戻してやれるのか思案していたところに、紙束を抱えた明久がやってきた。明久はその紙束を自分の担任の前に突き付けるなり、

「『確か、先生の子供ってこの近くに住んでるんですよね？』『そ

の子を………
楽しませてあげないので、『僕のことはほつといってくれ
ません？』」

脅迫した。

突き付けられた紙に書いてあったのはこの学校の教師のリストだっ
た。ただし、表沙汰になれば免職は回避できない、一発で検挙され
るような証拠の写真と一緒に記載されている。震える声でなんのつ
もりだ、と問い質すと、明久は周りの空間が歪むかのような邪悪な
表情で淡々と言葉を発した。

「『僕をほつとけば』 先生の子供は今まで通りに生活できて先生
は一人の生徒を見捨てたという最低最悪のレッテルを貼られる。』
『この紙束を受け取らなければ』 先生の子供の安否は約束できず、
自分の子供を見捨てたという最低最悪のレッテルを貼られる。』
まさに鞭と鞭ですね。』」

その日以降、明久の周囲の状況は担任の女性教師にまで無視される

ようなものになった。

明久へのイジメが途絶えたと同時に、次のターゲットとなったのが、例の桜色の髪が眩しい少女——姫路瑞希である。

元々、その体型のせいで男子からよくからかわれ、『地味好き』という不名誉なあだ名で呼ばれていたのだが、明久との体育の様子の一部始終を見ていたクラスメイトによってそれが本格的なものへ昇華した。

明久にしたイジメを施し、その都度純粋な瞳に大粒の涙が流れる瑞希を見て、クラスメイトは安堵した。

安心したクラスメイト達はイジメを本格化し、間接的な暴力を振るうまでに至った。瑞希はただ膝を抱え、ニヤニヤと笑うクラスメイトと純粋に笑う明久を交互に見遣ることしかできなかった。

そして、暴力は直接的なものになろうとしていた。

その日、瑞希はとうとう校舎裏に呼び出された。人目のつかない場所をわざわざ選ぶ理由など、人目についてはまずいことになる以外にありえない。それでもその後の報復が怖い瑞希にとって、無視するという選択を選ぶはずがなかった。

いつかのように夕焼けが眩しい放課後。瑞希は足取り重く校舎裏へと向かった。担任の女性教師に相談しても、何かと理由をつけられて話を聞いてくれない。その顔はやつれたもので、人気があって頼りになるいつもの先生は影も形も消滅していた。頼りにできる大人もいない、両親に心配をかけたくない彼女にとって、この状況を打破することは到底不可能だった。

今日は両親にどんな言い訳をしよう——日に日に嘘が上手くなっていくのを感じながら、陰鬱に赴いた校舎裏は、

「『ひどいよ』『瑞希ちゃん』」

圧倒的な血に濡れていた。

『ひつ……！？』

クラスメイトが螺子によって串刺しにされている中、返り血を全身に浴びた明久が瑞希を見据える。明久の嫌悪感に気が付かない純粹さを持つ彼女でも、その惨たらしい構図は彼女を震え上がらせるに足るものだった。体に不似合いな螺子を持つ彼の表情は、相変わらずの笑顔に少し不満げなもの。次いで、彼の口から出た言葉は、到底瑞希に理解できないものだった。

「『僕の友達を盗らないでよ』」

吉井明久。

この話は、もしも彼が球磨川楔と同じ異質で害悪な腐敗の人生を歩んでいたら、という机上の空論を著したものである。

マイナス

机上の空論（後書き）

【追記】

「君ってもしかして」の前書きを追加しました。

「大いに不満ですねえ」（前書き）

バカテスト・生物

第八問

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希、吉井明久の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。そして吉井くん。今ならカンニングと申し出れば許してあげます。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。工藤さんは真面目に回答していますよ？

須川亮の答え

『？女性　？幼なじみ　？女子高生　？若奥様　？幼稚園児』

教師のコメント

あなたの五大願望を聞いている訳ではありません。そして最後は犯罪臭どこるかまんま犯罪です。

「大いに不満ですねえ」

戦場は不気味な程静寂していた。

先行部隊。試験召喚戦争、通称試召戦争が勃発し、授業が自習となつたせいで閑散とした渡り廊下には、秀吉を含むFクラス十数名が待機している。渡り廊下の窓から見える外の様子は相変わらずの晴れ模様で、平和そのものの中、今から起こりうるであろう戦争を見守っていた。

「では、もう一度確認するぞい」

先行部隊の部隊長である秀吉が、廊下の向こうを見張っている部隊員にも聞こえる声で最終確認に移る。最終確認とは、もちろんこの戦争に関する自分達先行部隊のDクラス戦での戦法についてだ。

「基本、二人組でDクラスを相手にするのじゃ。お互いがサポートするようにの。囃にしてはならん。余計な不和を招いてしまふのじゃ」

DクラスとFクラスの戦力差は当然Dクラスのほうが上である。そのため、数で勝負する戦法でうまく立ち回らねばならない。

「戦死を恐れる必要はないのじゃ。代表が言うにはこの戦争を長引かせるつもりはないらしいからの。補習室に連行されても、すぐに解放することを約束しよう」

補習室、という単語を聞いて身震いするFクラスの面々だが、後半の言葉で安堵のため息を吐いた。補習室とはかくも恐ろしい場所なのである。

「じゃが、全滅する気はない。初めDクラスを圧倒し、旗色が悪くなったらすぐに引き上げ、中堅部隊と交代。大まかな感じはこの通りじゃ」

『『『おうつ』『』『』

付け足しておくと、秀吉率いる先行部隊はDクラスの戦力を削ることに同様、Dクラスの戦力を分析する役目も任されている。単純計算なら3倍の戦力を持つ相手だが、それではあまりにも大雑把すぎるのだ。今後の作戦のためにも、正しい戦力差を把握することが重要だと雄二は考えていた。

「Dクラスだ！Dクラスが見えてきたぞー！」

見張り役の声で廊下の向こうに視線を向ける秀吉。見ると、Dクラ

スと思しき生徒が群れをなして自分達のほうへ走り寄る様子があった。

場の空気がぴりつとした緊張感に包まれる。Dクラスが自分達との距離を徐々に詰める様を目の当たりにした秀吉は、その接触寸前にて声を張り上げた。

「開戦の雄叫びをあげよ！迎え撃つのじゃ——！！！」

「土屋！木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らし、廊下の向こうから美波が駆け寄り、現在の戦況を報告する。

中堅部隊。秀吉率いる先行部隊と本陣であるFクラスのちょうど中央に位置し、主な役割は時間稼ぎ、及び誘導。徐々に後退し、Dクラスの先行部隊を相手の本陣から引き離れた上で、こちらの本陣と回復試験を終えた先行部隊で撃退する、というスタンスが雄二の現段階での作戦だった。

この部隊に配置されているのは部隊長である康太とその補佐役の美波。隠密行動に長ける康太にとっては裏方に回りたいところだったが、すでにその必要はなくなったため、部隊長を任されていた。

「土屋、裏方の仕事はもういいの？」

「……………揃えるべきカードは全て揃えた。もうFクラスに敗北はありえない」

「す、すごい自信ね……………」

「……………（フツ）」

趣味が盗撮、特技が盗聴というRPGなら盗賊が天職の彼にとって、雄二の言うDクラスに勝つ布石を揃えることは造作もないのだろう。自分のクラスの勝利を早くも宣言する康太を見て、美波は戦慄した。

「ちなみに世界史の点数は？」

「……………18点^{フッ}」

「そんな点数で勝ちを確信できるなんて……………！」

別の意味で美波は戦慄した。

「……………それより、戦況」

「戦況？あ、ごめん、交戦状態に入ってたってことしか……………って土屋、何それ？」

「……………ICレコーダー。渡り廊下に仕掛けられた盗聴器を通して戦況を知ることができる」

「辞書みたいな説明はありがたいけどそれバツチリ法律に引っ掛かってるからね……………」

呆れの声を出す美波だが、康太がスイッチを入れると美波もさすがに口をつぐんだ。ザザザ……………とノイズが走るものの、康太と美波は流れる音声に耳を傾けた。

『さ……こい！こ……負……ぬが！……』
『て、鉄……ん！？い……だ！補……つだ……い……だ！……』

「うーん……ノイズのせいでよく聞こえないわね……なんとかならない？土屋」

「……………こればかりは、どうにも」

そう言いながらもカチカチとレコーダーを弄る康太。すると、その甲斐あってかどうかはわからないが、明確に聞き取れる程に音質がクリアなものになった。

『黙れ！捕虜は全員この戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわかんが、たつぷりと指導してやるからな。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう！』

「……………」

「……………」

カチ、と康太がレコーダーを止める。美波が硬直している中、至って真面目な表情で康太はまじまじとレコーダーを見つめ、ぽつりと呟いた。

「……………使えるかも」

その声が耳に入った美波が涙目で激しく首を振っていたが、康太の目に映ることはなかった。

「ふむ……………」

埃っぽいFクラスの教室で、雄二は片手に持つB4の紙束を見て思考に耽っていた。

Fクラス本陣。言い換えるならFクラス最後の砦にて、雄二はどつしりと構え、見事な代表の風格を醸し出していた。それを感じ取っているのか、他のクラスメイト焦ることなく教室のドアの前で待機している。

雄二の持つ書類に書かれているものはこのFクラスの現状の戦力だった。あまりにもひどい。主戦力は瑞希だと言っていた雄二だが、瑞希一人で戦争に勝てる訳もない。他のFクラスの点数も重要になってくるため、こうして自分の点数を紙に書いて提出させ、康太にまとめあげてもらったのだが……ひどい生徒は自分の点数すら覚えてない始末。とりあえずその生徒は先行部隊という名の生贄になってもらった（秀吉は部隊長なので戦死の可能性は一番低いのだ）。

（ま、そうこなきや証明できねえからな）

雄二の言う証明。それは、この世は学力だけが全てではないということ証明することだ。雄二自身はなぜそんなことをするのか話したがないが、遠い目をして窓の外へ視線をやるその姿はどこか哀愁が漂い、過去になんらかの分岐点を越えてきたことが想像できる。その分岐点が、雄二に勉強をする目的を見失わせ、過去の栄光を廃れさせたのだろう。

こういった言い方だと雄二に不幸が降りかかったと思わせてしまうかもしれない。だが、雄二自身はそれでよかったと思っていた。その分岐点を越えてきたことで、今の自分があり、勉強よりも大切なことに気づけたのだと。

その雄二の歩んだ過去は、結果も過程も原因も全て異なるものの、それらとは別の何かが、かつての明久——球磨川楔と共通しているように見えた。

球磨川楔は——

「代表！先行部隊が後退を始めました！」

「ん？ああ。両クラスの被害はどうなっている？」

「こっちは残り4、5人程にまで削られたものの、Dクラスの先行部隊もおよそ半分くらい補習室送りにしたようです！Dクラス先行部隊は今もなお侵攻を続けています！」

「半分か……上出来だな。中堅部隊は相手を油断させるために先行部隊より数を減らしたし、明久を配置したいところだったが、まあ康太でも全滅は防げるだろ」

パサリと資料をちゃぶ台に置き、腰を上げる。立ち上がった雄二の表情からは漂っていた哀愁の色はすでに感じられず、溢れんばかりの闘志が漲っていた。

「本陣に告ぐ！俺達は一時間後に中堅部隊に合流し、敵先行部隊を

攻撃する！Dクラスの先行部隊は中堅部隊までは全滅させようと食
い下がってくるだろうからな」

『『『おうつ！！』』』

「だが、相手が撤退を始めたら深追いは禁止だ。本陣が出てくるか
もしれないし、敵先行部隊を全滅させてしまえば相手に警戒されて
しまうからな。相手が油断した隙を突き、最後はDクラスの首を取
る！」

『『『うおおー！！』』』

「では、各自戦闘準備にかかれ！ナメきったDクラスに敗北をくれ
てやれ！」

『『『おつしゃああああ——つつ！！！！』』』

雄二の声に応え、最高潮にまで高ぶるFクラスの面々を見て、雄二
は思う。

自分の居るべき場所は、Fクラス（こゝ）に在る、と。

「『納得いかない』」

ちやぶ台ではなく、普通の教室にあるような椅子に座る明久が愚痴る。

回復試験会場。消費した点数はここで補給テストを受けることにより、回復することができのだが、戦争が勃発したばかりの今となつては、現在ここにいるのは無得点扱いの明久と瑞希、そして監督者である高橋洋子教諭の三人のみだった。

「吉井君、試験中は私語を慎むように」

「『だつてせんせえー』『今めちやくちや盛り上がってるところなのにそれに参加できないってめーちゃーくーちゃー萎えるんですけどー』『あーあ』『せえーつかく楽しいイベントの真っ最中なのになあー』」

「そういえば、相手はDクラスでしたか？確かにFクラスに姫路さんがいるのであれば振り分け試験直後といえどFクラスにも勝機はあるかもしれませんね」

チラリと瑞希に向けられた視線を追うように、明久もものすごい勢いでペンを動かす瑞希を見る。その表情はいつものおっとりとしたものとは正反対に、凜々しいという言葉が似合う顔つきだ。二人の会話に反応しない辺り、話が耳に入らない程集中しているということだろう。

「先生、次のテストをお願いします！」

「はい、どうぞ」

テスト開始からまだ半分くらいしか経っていないのに、瑞希はすでに三枚目のテストに取り掛かっていた。学年次席の頭脳は伊達ではないらしい。

「吉井君は、確か観察処分者でしたね。やはり畳にちゃぶ台は不満でしたか？」

「『大いに不満ですね』『と、言いたいところだけど』『僕個人としては畳もちやぶ台も好きですよ』『そもそも教室があるだけで残念ながら恵まれてますからね』」

「そうなのですか？なら、どうして戦争を？」

くあつと欠伸をする明久に高橋教諭が疑問を投げ掛ける。後頭部に手を組む明久は、その質問に答えることはなかった。

「『戦争を提案したのは僕じゃないですからねえ』 『まあ我らが代表エフゴリくんは打倒Aクラスを掲げてますから』 『ぶふっ』 『やばっ！自分で言ってる吹いちゃった！』」

「……Aクラスを、ですか？」

げらげらと笑い転げる明久を訝しげな目で見る高橋教諭。それはそうだろう。FクラスがAクラスを打倒しようなど、正気を疑いたくなるような話だ。

「……勝機はあるのですか？」

「『勝機？』 『ある訳ないじゃんそんなの』」

二度目の高橋教諭の質問に、今度はぴしゃりと言い切る明久。続いて明久から出る言葉は、およそ高橋教諭には理解できない言葉だった。

「『過負荷はくたかりはいつも負け続きですからねえ』『それでも勝ちたいから分の悪い賭けを楽しんでるんですけど』『まあこれだけは断言できるかな』『クラスが勝つても、僕が勝つことはありませんよ』」

「……では、負け続きだったあなたが、なぜ試召戦争を仕掛けたのです?」

そこで、明久はチラリと瑞希のほうを見た。彼女は今も懸命に問題を解き、クラスの手助けになろうと頑張っている。

その手助けになりたいと思っているクラスが、彼女のために戦争を仕掛けたということに気づかずに。

「『……………。』『さあ?』『エフゴリくんに聞けばわかると思いますけどね』」

明久の視線に気づいた高橋教諭がわずかに微笑む。教壇からこちらを見る高橋教諭のそんな表情に気づいた明久は、困ったようににこっと笑い、肩を竦めるのだった。

そして、次は明久の質問。

「『えっと』『なんで姫路ちゃんはあるのに問題を解けるんでせうか』」

ここ文月学園は時間有限、テスト無制限という制度を採用している。しかし、明久は憑依してこの文月学園の生徒となったため、そんな制度など知らない。

つまり、

「吉井君も見習ってくださいね。姫路さんに少しでも近づけるように」

「『はあ……』」

明久が落とす視線の先には、回答欄が全て埋められた一枚だけのテスト用紙。

高橋教諭も明久の質問の意図を正しく聞き取れていないせいで、彼にとっては的外れな返答になったのだった。

「戦争に犠牲はつきものよ」(前書き)

バカテスト・国語

第九問

問 死亡の反対語を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『誕生』

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

『復活』

教師のコメント

できません。

吉井明久の答え

『蘇生』

だからできません。

島田美波の答え

『虐殺』

教師のコメント

このクラスは実に様々な回答がありますね。とりあえず島田さんの『死ぬ』の反対が『殺す』という思考回路に鳥肌が立ちました。

須川亮の答え

『結婚』

教師のコメント

それ男性にとって人生の墓場じゃないですか。

「戦争に犠牲はつきものよ」

「島田にムツツリーニ！前線部隊が後退を開始したぞ！」

「……………総員突げ、」

「総員待避よ」

ところ代わって中堅部隊。暇を持て余しているといった感のFクラスの隊員達が報告係の言葉で色めき立つ。しかし、部隊長とその補佐の意見が真つ二つに分かれたせいで、出鼻をくじかれたように揃ってずっこけた。

「文句はないわね、土屋？」

「……………ない訳がない。先行部隊が全滅する」

「戦争に犠牲はつきものよ。帰還した後せめて黙禱を……………って土屋、何コレ？」

さっきのレコーダー越しに聞いた西村教諭の声で怖じけづいたので
あろう美波に、スツと裏返しにされた長方形の紙を突き出す康太。
つい条件反射で受け取った美波が表に目を向けると、それは全くブ
レのない綺麗な写真だということがわかった。

付け加えるなら、自分と明久が仲良く手を繋いでいる様子が写され
たもの、ということも。

「……………サービスでもう一枚つけてもいい」

「総員突撃い——っ！」

実にチョロい美波だった。

ちなみに康太のブラックリストに明久の名前が追加されたのだが…
…それはまた別のお話。

「おお、島田にムツツリーニ！はっ、はっ……………援護に来てくれたん
じゃな！」

DクラスとFクラスがぶつかり合い、ついに本格化してきた戦場の
向こうから息を切らした秀吉が走り寄る。かなり消費したのだろう、
美波と康太の前に来るなり膝に手について荒い息を整えるように深
呼吸を繰り返していた。

「……………！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「お疲れさま木下。大丈夫なの？」

指が擦り切れるかと思う程カメラのシャッターを切る康太に代わって美波が質問する。今の秀吉を見て、相当厳しい戦いで疲れ切ったのだと思ったのだろう。

だが、美波の予想に反し、最後に一つ大きな深呼吸をして秀吉は顔を上げた。その表情は疲れの色こそ見えるものの、何かをやり遂げたような達成感があった。

「うむ、戦死は免れておる。とは言え召喚獣はもうへろへろじゃがの。かなり削られてしまったのじゃ」

「そっか。あっちの先行部隊は？」

「大体半分くらいは削れたと思うぞい。では、ワシは雄二に用があるでの。島田達も頑張っしてほしいのじゃ」

「あ、うん。お疲れさま」

うむ、と頷いてFクラスの教室へと去っていく秀吉。それに続くようにFクラスの先行部隊も帰還していくが、どう見ても戦争前より数が少ない。やはり、それ程厳しい戦闘だったのだらう。

次は自分達の番だ、そう思って前を向く。突撃を浴びていたさつきとは違い、今の美波には充分なやる気を感じられた。自分も戦闘に加わりうと思った、その時。見知った顔と目が合った。

「あつ！やつと見つけましたお姉様！先生、こっちです！」

「み、美春！？あんたもう立ち直ったの！？」

「当然です！もちろん、お姉様とブタ野郎のあの光景を見て首を吊りそうになったのは事実です！」

「重っ！あんた高校生のくせになんて重い恋愛感情抱いてるのよ！？」

「ですが、美春と美紀さんは気付きました……」

美紀、というのはおそらくあの三つ編みの女子生徒のことだらう。この二人を放っておくとロクな結論に行き着かない、と美波が顔をしかめるが、そんなことを気に留めることなく美春は言葉を続けた。

「そう……奪われたのなら——寝取ってしまえ、と!!」

「考えうる限り最悪の結論に行き着いたあ——っ!？」

つくづく苦勞している美波だった。

ちなみにその構図を想像した康太が鼻血の海に沈んだのだが……それもまた別のお話。

「ふふふ……今なら保健室が空いてることも確認済みです。そしてお姉様としっぽりするんです!」

「しかも計算高い!?!いい加減ウチのことは諦めてよ!」

「はい!諦めます!既成事実さえ作ってしまえばこっちのものですから!」

「あんた既成事実の意味知ってるの!?!女の子同士じゃできないでしょ!?!え、なに、それともウチがおかしいの!?!」

「お姉様あー！美春の愛を受け止めてくださあー！いつ！試獣召喚サモンつ！」

「くうう……！殺らなきゃやられる……殺らなきゃやられる……！
！試獣召喚サモンつ！」

二人の喚び声に反応し、幾何学的な魔法陣が浮かび上がる。やがて光と共に美波の前に現れたのは、まさしく美波そっくりの『召喚獣』。

教師の立ち会いの下にシステムが起動し、召喚者の喚び声に応えたその姿は、表現するなら『デフォルメされた島田美波』という感じだろう。身長こそ小さいものの、軍服姿にサーベルを持つその姿は実に戦争に適した姿と言えるものだった。

目線を前に向けると、同じく美春が召喚したと思われる召喚獣が剣を正面に構えている。かと思いきや、その直後、剣を振りかぶりつつ突進してくる。明らかに美波の召喚獣を倒すつもりだろう。

ここは避けたいところだったが、条件反射と操作の経験不足のせいで美波は刀身の細いサーベルで受けてしまった。ぶつかり合う武器にいかにも劣勢の自分の召喚獣を見て、美波の表情が苦悶に歪む。

化学

Fクラス 島田美波 53点

V S

Dクラス 清水美春 94点

続いて表示される点数。予想通り、美波の不利は火を見るより明らかだった。その上体勢も不利なものになってしまったせいで鏢競り合いの拮抗は長く続かず、ついに美波の武器が弾かれてしまう。

倒れ込んだ美波の召喚獣の首元に突き付けられる美春の剣。下手に動けばすぐに戦死させられるだろう。

美波の負けだ。

「さあお姉様！美春と保健室に行って共に愛を育みましょう！ハアハアハアハア……！」

「つ、土屋あ！助け——」

と、美波の助けを呼ぶ声は途中で遮られた。

「……………試^{サモン}獣召喚」

ムッリーニ
寡黙なる性職者。その静かな声は妄想に耽る美春の耳に届かない。
美春の死角から呼び出された康太の召喚獣は、両手に一本ずつ握る
小太刀を閃かせ、

「あ、あぁっ!？」

化学

Fクラス 土屋康太 28点

V S

Dクラス 清水美春 0点

美春の点数を残さず刈り取った。

「助かったわ土屋……！西村先生！戦死者です！ここにきてくだ
さいっ！」

「ん？おお清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ……」

近くにいた西村教諭が美春の襟首を掴む。召喚獣が戦死した生徒は

戦争が終わるまで補習室で特別講習、というルールの下、そのまま補習室に連行ということだろう。美波の召喚獣は負けただけで戦死しなかったのは不幸中の幸いと言える。

「くっ、お姉様！美春は諦めませんか！美春はお姉様を運命の赤い鎖で繋ぎ止めるんですからね——っ！！」

「お願い美春！それただの監禁だって気づいて！できれば犯罪だってことも気づいてえっ！」

危険な発言を残し、美春の姿がどんどん小さくなり、ついに消えた。たった一人相手にしただけなのに膨大な疲労感が美波を襲い、思わずその場にへたり込む。

戦場の勇ましい声がどこか遠くに聞こえる中、ポンと肩を叩かれた。ゆっくりとそちらに目を向けると、康太が自分の肩に手を置いている。

「……土屋……」

「……………（コクリ）」

ただ頷いただけで皆まで言うなと言われていた気がする。康太の全てわかっている、というような表情を見て、美波は自分の内側から

込み上げてくるものを感じた。

「……………貸し一つ。返却は被写体で」

どう考えてもただの悪寒だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250y/>

『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

2011年11月29日19時45分発行